

第1章 並べ替え

第1節 並べ替えの概要と解法

- 1 並べ替えとは：いくつか分割された文章を、筋のとおったまとまりのある文章に並べ替えるという問題

【出題のされ方】

- ・ 次の短文 A～F の配列順序として、最も妥当なのはどれか
- ・ 次の A～F を並べ替え一つのまとまった文章にする場合、最も妥当なのはどれか。
- ・ 次の の文の後に、A～E を並び替えて続けると意味の通った文章になるが、その順序として最も妥当なのはどれか。

2 解法上のポイント

(1) 文章を一読する

まず、どんな文章を並び替えるのかを簡単に把握する。特に注意すべき点は、「指示語」「接続詞」「キーワード」である。

(2) 選択肢を確認

次に、選択肢を確認し、冒頭文が何になるのか、あたりを付ける。

選択肢によっては、いきなり接続語から始まっていて意味が通じないものもあり、そのような肢は切ることができる。

【注意】

なお、文頭の選択肢が指定されている場合もある。この場合、この文頭にくる選択肢にヒントが隠されていることが多い。そのため、文頭にくる選択肢は必ず確認すること。

(3) 短文をつなげる

① 指示語がある場合

指示語がある場合、どの部分のことをさしているのかを把握する。

【指示語の例】

A そのような の過ごし方はとても有意義であろう。

E 彼らは趣味に没頭する を送っている。

「そのような」が示す言葉が問題文中にある。それを見つければ、文章の前後関係がわかる。上記の場合であれば「AはEの後ろにくる」ということがわかる。

その際、指示語が何を指すか「キーワード」がヒントになる。

ただし、「すぐ後ろにくる」とは限らないので、気をつけること。

② 接続詞がある場合

接続詞がある場合、どの部分とどの部分を結んでいるのか、また短文がどういう関係となり文章を構成しているのかを確認する。

【接続詞の例】

B **しかし**、私は〇〇であると考えているのである。
↑
D **たしかに**、一般的には△△と言われている。

「しかし」の文章で自分の意見を述べ、「たしかに」という文章で一般論を述べている。

逆接の接続詞は、自分の意見と異なる文章を受けて文章をつなげるものである。

そのため、「BはDより後ろにある」ということがわかる。

これ以外にも「しかし」などの「逆接」はヒントになる場合がある。例えば、

A **しかし**、～ ということである。
B 〇〇ということにはならない。
C △△ になるということであろうか。
D ×× を確認しておこう。

「しかし」が含まれるAの文末に注目すると、肯定文になっている。ということは、この文の前にくる文章は否定文になっていなければならない。よってAの前にはBが来る。

③ キーワードを確認

C 私は**メモ**を見直しても全く話が分からなかった。
F 上司の話を**メモ**を取りながら、なんとか聞いていた。

文章のキーワードから判断する。文章整序の場合、同じキーワードを続けて使う場合が多いため、ヒントにすることができる。上記の場合では「CとFはつながる」。

また、キーワードを含む文章を小さなグループにまとめ、それから全体をまとめていくと、整序しやすい。

④ 短文の内容を確認し、グループ分けする。

- A 日本人は〇〇
- B 日本の文化では～
- C 欧州を例にみると、…
- D △△での日本は…
- E …という点が海外の特徴ともいえる。

- 1 C－A－B－E－D
- 2 C－E－B－D－A
- 3 C－D－A－E－B
- 4 D－C－E－A－B

A・B・Dは日本についての話であり、C・Eは日本以外という内容になっている。そのため、「ABD」「CE」というグループができる。順番はどうあれ、これらはセットになっていることがわかるので、選択肢をみて、これらが並んでいないものは不正解となる。

上記の場合には、「ABD」が並んでいるのは選択肢2しかない。よって2が正解。などと判断することができる。

(3) 選択肢を確認

自分が決めた順序と一致する選択肢を探す。

全部並び替えてから、ということではなく、一部の順序しかわからない場合はその順序を含む**選択肢を選ぶ**。

指示語・接続詞・キーワード・内容によるグループ分け



その都度、**選択肢と照合し、違う選択肢を消去していく**。

選択肢がない場合には、自分の考えた順序は間違いなので、その時点で考え直す。

(4) 選択肢を一読する

最後に、完成した文章が本当に正しい順番で並べられているかどうかを通読する

確認のためだが、ここで文脈上不自然なものがあれば再検討をする。

第2章 趣旨・内容把握

第1節 要旨把握の概要と解法

1 要旨把握とは：問題文中での筆者の主張を読み取る問題。

(1) 出題のされ方

- ・ 次の本文の要旨として正しいものはどれか。
- ・ 次の本旨(主旨)として正しいものはどれか。
- ・ 次の文章で、筆者が特に主張したいことはどれか
などである。

要旨・本旨・主旨など、本来の言葉の意味は違いますが、試験では同じ意味と考

(2) 注意点

あくまで本文中の筆者の主張を読み取ることが求められる。

そのため、答えの根拠が本文中に必ずある。一般論から考えれば正しい場合であっても、本文中に根拠がなければ、不正解になるということを確認すること。

2 解法上のポイント

前述のとおり、要旨把握＝本文中の筆者の主張であり、言い換えれば「伝えたいこと」。伝えたいのだから、何か目立たせる特徴がある。この特徴をつかむことが重要。

以下、要旨把握上のポイントを挙げていくので、確認してほしい。

(1) 強調表現

最もわかりやすいものが強調表現である。伝えたいからこそ強調している。

① 文末表現

- ・ ○○は**必要**だ
- ・ ○○は**重要**である。
- ・ ○○し**なければ**ならない。
- ・ ○○ということがありえるであろうか(反語表現)。
- ・ ○○**すべき**である。 など文末に強調表現があるときは注意する。

第1問 並べ替え（平成18年第60問）

次のア～オの文は、枠内の文に続く一連の文章をバラバラにしたものである。正しい順序は、1～5のうちどれか。

科学者の造る共同体では、科学者は、自分の関心に従って研究を行い、研究成果は、同じ専門家仲間とのみ共有する。そこで得られた成果を使ってさらに研究を先に進めるのは、自分自身か、同じ共同体に属する仲間だけである。それを評価するのも共同体の仲間だけである。こうして科学は、個々の専門領域において成立している専門家の共同体の内部で自己完結し、自己充足している知的営みとして、自らを確立していったのである。この科学の特性は、現在でも半ば以上維持されてきている。そうである限り、科学と、それを取り囲む一般社会との関係は、基本的にはどこにもないことになる。

ア こうして19世紀以降ほぼ一世紀の間、共同体の内部で自己完結的、自己充足的に営まれてきた科学は、否応無く、共同体の外部の一般社会との間に、強い絆を持たざるを得なくなったのである。他方国家は、社会的利得を生み出す「金の卵」として科学研究を遇するようになり、様々な制度的対応を行うことになった。

イ しかし、科学にとってある意味では幸福であったこうした時代は長くは続かなかった。第1次世界大戦の頃から、軍事と産業において、科学のなかに蓄積されている知識の「利用可能性」がようやく認知されるようになった。一方では、工業における「開発」に科学研究が寄与することが明らかになってきた。

ウ しかし、同時に科学者は、それだけの「社会的」責任を負った、ということをおぼろげに覚悟するわけにはいかない。かつて完全に自己充足的な形で行われていた科学であれば、研究に対する責任は、自分たちの共同体の内部の同僚に対してのみ負えばよかった。今日のように、社会との絆が築かれた後では、研究結果がそのまま社会全体の動向を左右するような可能性が生じている。したがって科学者は、同僚に対してよりも遥かに重い責任を、社会全体に対して負わなければならないようになってきているからである。

- (1) **枠内の文**を読むと、目につくのが「同じ専門家仲間とのみ共有する」、「同じ共同体に属する仲間だけである」、「共同体の仲間だけである」、「専門家の共同体の内部で自己完結し」、「科学と、それを取り囲む一般社会との関係は、基本的にはどこにもない」という、「科学と一般社会は関係がない」ことに関するフレーズである（最後まで目を通すと、その点が浮き彫りになる）。
- (2) 次に、選択肢（1～5）を見ると、最初に来るものの中で複数あるのが肢のエである。本試験の現場では、まずはこのエを先に検討するのも効率的かもしれないが、ここでは、一応にアから順に見ていこう。
- ア 書き出しは「こうして」となっていることから、アの前には、「科学は、否応無く、共同体の外部の一般社会との間に、強い絆を持たざるを得なくなった」ことの原因になり得る文章が来ることが予想される。
- イ 「しかし、科学にとってある意味では幸福であったこうした時代は長くは続かなかった」とあるので、このような「時代」を説明する文章が前に来ることが予想され、そのような文章を逆接の「しかし」でひっくり返している。また、「第1次世界大戦の頃から、…科学…の『利用可能性』がようやく認知されるようになった。…科学研究が寄与することが明らかになってきた」とあり、第1次世界大戦の頃（＝20世紀初頭）に状況が変化したことが書かれている。
- ウ 「しかし、同時に科学者は、それだけの『社会的』責任を負った」こと「を忘れるわけにはいかない」とあり、釘を刺すような文章になっている。さらに、「自分たちの共同体の内部の同僚に対してのみ負えばよかった。今日のように、社会との絆が築かれた後では」とあることから、**枠内の文**とは異なり、「科学と社会は関係がある」旨が記載されている（その後続く文章も同趣旨である）。

エ 書き出しは「このように考えると」となっており、「19世紀のヨーロッパに誕生した科学は、…社会的効用という概念の外に意図的に自らを置こうとした…芸術や文学のように、直接的な社会的利得を追求しない営み、携わる人々の好みと趣味に由来する喜びをひたすら追求する営みの一つとして、科学の存在を許した」とあることから、エの前には、「19世紀のヨーロッパでは、科学は社会と関係がなく、社会的利得は追求せずに携わる人々の好みと趣味に由来する喜びだけ追求していればよかった」ということと同趣旨の文章が来ることが予想される。そして、ここまで見てきた結果、そのような趣旨の文章は枠内の文である。

なお、イのところで述べたように、第1次世界大戦の頃とは20世紀初頭のことであるから、19世紀について述べているエは、アよりも前に来る（アに「19世紀以降ほぼ一世紀の間」とあることから、それは確実である）。

オ 書き出しが「もちろん、その絆は」となっていることから、この前に来る文章では「絆」について触れられていることが予想される。そして、アは「19世紀以降ほぼ一世紀の間」、「科学は…共同体の外部の一般社会との間に、強い絆を持たざるを得なくなかった」というように「絆」を持つに至った流れを表していることから、オの前にはアが来ることが予想される。

また、その「絆」は「科学にとって負の意味ばかりではなく「…研究のための資源を、外部社会から、それも心理的な負い目を持たずに獲得することができるようになった」というプラスの面もあったことが書かれている。

「しかし」、その資金の獲得は、「自分たちの研究成果はいずれどこかで、社会的利得に還元される」ことがいわば前提条件になることも書かれている。

- (3) 以上から、「エの後の方にアが、そして、アの後の方にオが来る」ということが分かったので、その順番が含まれている選択肢を探すと、4か5しかない。よって、枠内の文の直後にエが来ることが決まる。そして、このことは、上記(2)エで検討した内容と合致する。

そこで、次にイが来るべき場所を検討すると、イは、「幸福であったこうした時代」が第1次世界大戦の頃（＝20世紀初頭）から変わってきたことを述べており、この「幸福であったこうした時代」は、まさに「芸術や文学のように、直接的な社会的利得を追求しない営み、携わる人々の好みと趣味に由来する喜びをひたすら追求する営みの一つとして、科学の存在を許」された時代である「19世紀のヨーロッパ」を指している。そうすると、イの直前にエが来るべきであることから、4が答えであることが分かる。